

孔雀明王画像の研究

—東京藝術大学大学美術館所蔵本を中心に—

原瑛莉子（奈良国立博物館）

孔雀明王画像は、不空訳『仏母大孔雀明王経』を主な所依経典とする孔雀経法の本尊画像である。その図像は不空訳『仏説大孔雀明王画像壇場儀軌』（以下、『儀軌』）に依り、国内に伝わる諸本の多くは、仁和寺本などの請来画像や文化庁本など円相を伴うものを除き、この『儀軌』と、これに基づいて弘仁12年（821）に供養された四幅一丈の孔雀明王像（現存せず）が規範となっているとされる。

東京藝術大学大学美術館本孔雀明王画像（以下、藝大本）は13世紀前半頃の作と考えられ、先学により安楽寿院本（12世紀末～13世紀前半）との共通性が指摘されているが、藝大本を主体とした作品研究は未だ無い。

本発表では、まず研究史を概観し、孔雀明王画像を概括した近年の増記隆介氏の研究に依拠しつつ、藝大本及びそれと分類を同じくする安楽寿院本の両者を図像・像容・細部の形式の観点から比較する。

両本の原寸大の描起こしを作成し、それらを重ね合わせて像容を比較すると、明王の四臂の太さと角度、衣文線の間隔と長さ、胸飾・臂釦・腕釦の大きさと形態が細部まで一致した。これにより両本には単なる類似を超えて粉本（あるいは絵様・紙形）の介在する可能性が大いに考えられる。より具体的にいえば、藝大本は安楽寿院本乃至はそれと同系の図像の粉本をもとに描かれたと考えられる。

一方で、藝大本は安楽寿院本と異なる表現も見られる。明王と孔雀が安楽寿院本に比べると上下方向に離れ、そのため蓮華座前面が現れること、孔雀頭部周辺と蓮華座正面に不自然な下描きの墨線が存在する点である。すなわち明王の腰布の衣文線が孔雀の両目にまで引かれながらも途切れ、また明王の条帛の輪郭線と衣文線も途中で不自然に途切れており、別筆で再び引き連ねられているのである。これらの線の途切れた先端をたどると孔雀の冠羽から首あたりの輪郭が浮かび上がってくる。

すなわち藝大本は、孔雀が重なる部分をあらかじめ空白にしながらまず明王を下描きし、孔雀を描く段階に至って当初想定した位置に孔雀を配することを止め、ややこれを下げる修正を行ったといえる。その結果、当初空白にした部分（明王の条帛）に線を加筆し、孔雀の両翼で隠れるはずだった蓮華座前面に蓮弁や蕊、明王の脛前の瓔珞を描き加える必要性が生じるなど安楽寿院本と異なる表現になったのである。

藝大本が安楽寿院本乃至はそれと同系の図像に基づいた粉本を用いて下図を描きながらも途中で像容を改変した理由は、造形的観点からいくつか考えられるが、確たることは不明である。しかしながら、粉本の介在を確かに想定できる孔雀明王画像が存在することは、同画像における図像の権威と規範力を物語る。さらに制作過程における粉本の必要性和その使用の好例が藝大本と安楽寿院本に示されていることは、仏画制作における粉本の意義一般を考察するうえで重要であるといえよう。